

聖地の復興運動としての石仏奉納 ——立久恵峽の千体仏——

鈴木岩弓*

On the stone figures offerings as the revival movement of sanctuary
—— SENTAIBÜTSU at the Tachikue Valley ——

Iwayumi SUZUKI

I. はじめに

人が神仏に関わりを持つ際に採られる信仰行動の一つのあり方として、神仏への「奉納行動」をあげることができる。それは絵馬、写経、鳥居、髪の毛などといった、なんらかのくもの>を神仏に対して献上し、そのことを通じて祈願・供養・感謝といった<祈り>を捧げようとする行動様式である。そのようなものうち本稿では「石仏奉納」の事例を取り上げ、それを分析する中からその種の信仰行動様式の意味を探ってみることにしたい。

現在残されている石仏の調査結果から、我国で石仏造立が始められるようになったのは奈良時代まで遡ることが可能である¹⁾。しかしそれがとりわけ庶民レベルで盛んになってきたのは、仏教がかなりの程度日本の変容を遂げてきた近世になってからのことといわれ、その時代に造られた石仏は我々の身近においても今なお数多く見ることができる。それらからは、高額な拝観料などで話題になり、「大仏商法」の異名を持つような最近の大仏造営

ブームとはおよそ異なった、庶民の素朴な信仰心を窺い知ることができるよう思われる。かかる庶民レベルでの石仏造立は現代でも引続き見受けられ、特に近年各地で盛んに行なわれている「水子地蔵」の造立のように、新たに一つの様式を確立して定着しつつある場合も見られる。

ところでそのように造立された石仏であっても、それが「奉納」という行動様式の一環から神仏との関わり的手段として造られた場合、それを安置する<場>が問題となってくる。即ち、なんらかの神仏との交感を目的として石仏を造立する際には、その神仏のいる、あるいはその神仏と関わりが持てると観念される<場> (=「聖地」)に安置しなければ、交感の意味をなさないのである。それが故に、石仏が奉納される<場>というのはその多くが神社・仏閣をはじめとするいわゆる宗教施設であり、たとえ施設はなくとも、神仏との交感が可能であることがなんらかの形で意味付けされた特別な<場>に限られることとなる。この点が同じ形態をとる石仏でありながら、死者の依り代として、また死者に対する慰霊、守護のためにその現場に立てられる、

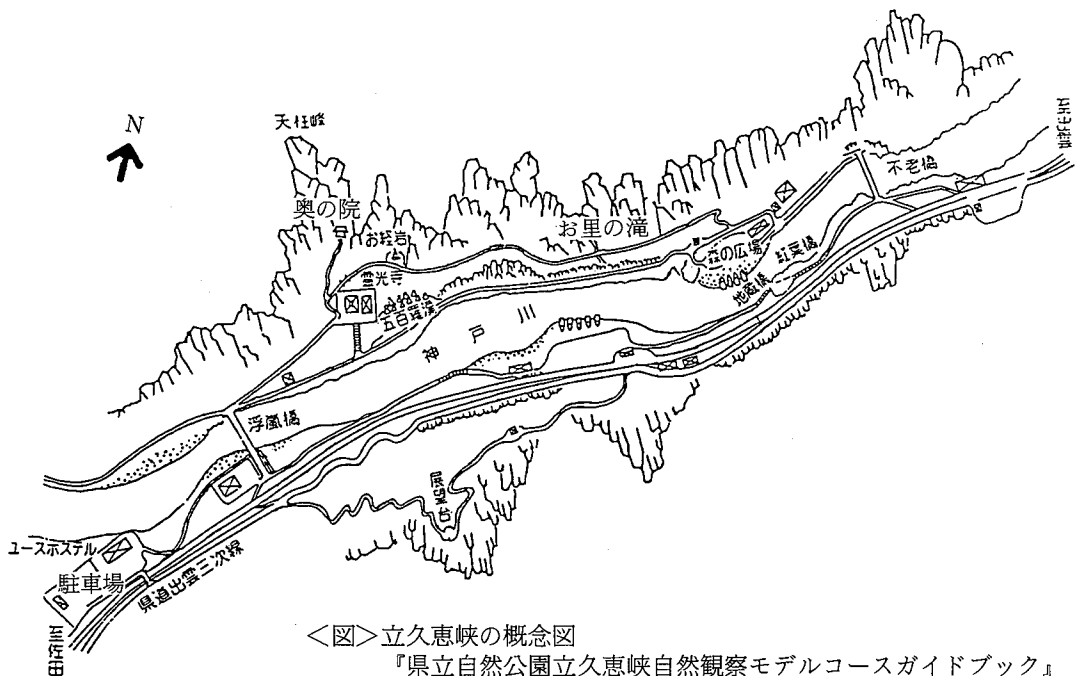
* 島根大学教育学部社会科研究室 (社会学)

交通事故の犠牲者のための地藏仏などとはその意味が異なっている。

さてここで対象として取り上げるのは、現在島根県の立久恵峡において行なわれている「石仏奉納」の事例である。立久恵峡は出雲市南部の乙立町から所原町にかけての神戸川流域に広がる、出雲地方では代表的な峡谷の一つである。川に沿って走る県道出雲三次線の両側に迫り来る、標高100～150mの奇岩や断崖の連続は、「山陰の耶馬溪」の異名からも窺えるように、古来見る人々の心をとらえ、この地を景勝地あるいは宗教上の聖地としてきた。即ち、安山岩質の角礫集塊岩が風化水食作用を受けて形成されたといわれる地形は、山陰における代表的集塊岩峡谷として、昭和2年には国の名勝天然記念物に、また昭和39年には県立自然公園に指定され、現在でも出雲市にとって代表的な観光地となっている²⁾。また「天柱峯」と呼ばれる峡谷内でも目立つ

た形の岩柱の麓には、大正8年に開かれた曹洞寺院、立久恵山靈光寺があり、これが峡谷内の宗教施設の実質的中心となっている。この寺院を通じてなされている「石仏奉納」の実態が、本稿で手がかりとする事例であるが具体的には以下のように論を進めることにしたい。

1. 靈光寺ができる以前の立久恵峡における「宗教史」を再構成する。
2. 大正年間に靈光寺が開かれた背景及びその経過を明らかにする。
3. 靈光寺による聖地復興の原動力となっている「石仏奉納」の実態を、ここでなされている〈祈り〉に着目して把握する。
4. それらをもとにこの地が果たしている宗教的役割を考察する。



〈図〉立久恵峡の概念図
『県立自然公園立久恵峡自然観察モデルコースガイドブック』
所収の概略図をもとに作成

II. 立久恵峽の「宗教史」

この峽谷の名称である「立久恵」の由来について、確固たる根拠を示す説は現在までのところ見当たらない。しかし安政2年(1755)にこの地を訪れた鴻雪爪の「亀峽閑棹」に、³⁾「土人呼日立杙以形状名也」と見えるように、その地形があたかも杙を立て並べたがごとき景観から、初めに「立杙(タチクイ)」と名付けられ、その音が転化して「タチクエ」となったと考えることが一般的である。⁴⁾但しその表記に関しては、宝暦14年(1828)の桃白鹿による『游神亀峽記』では「土人又呼為多智久慧 不知其謂也」(傍点は引用者)とあり、⁵⁾また現在聞かれる伝承の中には、下流の金剛峯寺に弘法大師が滞在された際、この地に足を延ばされて「久しく恵みを立てる」ように命名したとするものもある。なお上述の桃白鹿により命名された「神亀峽」の呼称は、それ以後文人墨客などを中心に立久恵峽の異称として定着し、現在に至っている。

一般に出雲地方の古い姿は、『出雲国風土記』から明らかになることが多いが、この地に関する記載は残念ながら見られない。ただここにあったとされる亀淵山飛光寺に関してはその他の文書により縁起が伝えられており、これを検討することを通じて、この地の古い姿を多少とも推定できるものと思われる。

現在まで伝わっている縁起は数点見られるが、その内容については大きな相違は認めたい。ここではまず、『立久恵亀淵山飛光寺縁起』(以下『飛光寺縁起』と略称)を引用し、その概観を把握することにした。霊光寺に保存してあるこの文書は、年号の記載が見られない卷子で、出雲市塩冶の神門寺にある原典を同じく古志の阿弥陀寺が写したものを、

さらに書写したものと言われている。⁶⁾

雲州神門郡立久恵亀淵山飛光寺は、仁王五十三代淳和天皇御宇、天長年中の御草創也、此寺の縁起を尋ぬるに、天長二年乙巳正月中旬の頃なりしに、彼の山の麓に大河有り、その河辺に夜な夜な呼ぶ声ありて光を放つ、諸人奇異の思をなす、然るに紀州高野山の学匠浮窓律師、諸国行脚の折柄、その頃当国に来至し、律師此の由を聞しめして、立久恵へ登山有之、その処地を見給ふに、後には峨々たる巖石をおおい、前には洋々たる流水あり、其の河の面を見給ふに、不思議や光明赫々として威光巍巍たる御仏一体、波の上に浮せ給ふ、近より見給へば大いなる青甲の亀に座し給ふ、御仏は亀甲をはなれ傍の岩の上に座し給ふ、亀は則ち、深淵にしずみ入りぬ。彼の僧感涙肝に銘し、御尊体に近づき、忝づけなくも御仏体を背に負ひ奉り、凡そ高さ二百二十丈余りの巖石の間に大いなる巖礪あり、その礪の間に御仏体を安置し給ふ。律師は都に上り、彼の立久恵の有様、御仏体の不思議を洛中洛外に申しひろめ給へば、此のよし禁裏へ御ん聞えありて浮窓律師を御召し彼の立久恵の由来を、御問ひありけるに、律師詳に奏聞なされたれば、御門いと殊勝に思しめし、其夜、御寝なりければ、不思議の御霊夢を蒙り給ふ。その御夢に御仏体、天皇の御枕本に立ちたせ給ひ、我は雲州立久恵山の薬師なり、我に衆病悉除の願あり、汝我を念ぜば、無病延命ならんと御告げありて、尊体はさり給ひぬ、天皇夢覚め、虚空を拝し給へば、殿中に霊香薫し、仏体は見えさせたまはず、天皇御感不淺則ち、勅使とし

て、飛田の郷を雲州へ下させ給ふ、勅使、立久恵山に詣でありて、薬師如来を拝見ましまし、則ち帰洛ありて霊山のあり様、御尊体の殊勝さ、言葉にも宣べがたく誠に正真の如来に逢たる心地したると、言上申されあれば、御門叡慮斜めならずおぼしめし、彼の浮窓律師を御召しあつて、黄金千枚、下し置かれ、汝は雲州へ下り、彼の如来の御堂を建立致せとの勅定によって、雲州へ下向有り、さて財木は土佐の国へ仰せ付けられ、最早取集め海辺へ出し雲州立久恵山御用木と書付致し置けるに、其夜風雨つよく荒波に押流され、明朝財木は一本もなく、故に浦々御詮義有りければ、不思議や如来の御徳にやありけん浦伝え島伝えに、雲州三保が崎と云う処へ寄りあつまりぬ、寄代至極の事なり、さて、御堂は翌年丙午の秋御造立成就し、御厨子は、七宝荘巖の巻柱殊勝弥々なる御寺なり。

都より大仏師を呼下し、御脇立に、日天月天十二神を造り立て、即ち十二所権現と勧請し給ふ。さて、御堂成就の奏聞を遂げたれば高野山より快賢僧正御下向ありて、明くる年、天長四丁未三月十二日最上の吉日なれば御堂供養に、曼陀羅供を行じ給ふ。この山如来の霊地なれば虚空に、音楽の声あつて、二十五の菩薩御来臨、舞楽に相交へ、鈴、錫杖、独鈷の音、幡花曼曼陀羅華は風になびき抹香、焼香護摩の焰は隣山叢樹の梢にまひ、さながら成道も、かくやならんと、殊勝さ尚も増さりぬ。去る程に、修法御成就しける後、亀淵山飛光寺と勅筆の御額をかけさせ給ふ。次第に此山繁昌して、院は千坊に及べり。信心の輩、この仏を念じ

奉れば、此の如来は、衆病悉除の願あることによって、現当にその利生多し、亦西方極楽世界無量寿仏のみもとに生じ、正法を聴聞せんと願つて、未ださだまらざるもの、若し、薬師如来の名号を聞けば、命終るの時にのぞんでは菩薩あつて、神亀に乗り来つて、その順路を示さんと云へり、かたがた以て、此の如来の御慈悲、凡慮のはかる所にあらず、故に近国遠国に至る迄、貴賤群集をなす事、暇あらず、二世の当益疑なきもの也、御本尊は申すに及ばず本来の霊場なれば世にたくひなき御寺也。

ここでは、浮窓律師が薬師如来を発見したことからこの地に寺院が開創されるに至る経過を、淳和天皇の〈霊夢〉や、土佐で流れ出した御用木が雲州三保が崎へ自然に集まって来るという〈奇跡〉を織りまぜながら述べられていた。この資料は史料としての価値は別として、現在までに入手したもののうちで最も詳細で具体的な内容を示す縁起と思われるが、淳和天皇の時代にこの地に寺院が開かれたとする内容は、近世の文献においても指摘されている。ちなみに享保2年(1717)に出された『雲陽誌』では、古老の伝えとして

此山は淳和天皇の御宇南紀の密僧淳窓律師の開基なり薬師は麓の古志川の水底よりひとつの霊亀負出たり故に亀淵山と号し飛光寺と称す

とある。⁷⁾この記述では密僧の名前が『飛光寺縁起』とは異なっているが、内容に関しては大きな違いは見られない。また寛保4年(1744)の『出雲欽』では以下のようにある。⁸⁾
縁起二日人皇五十三代淳和天皇御宇天長二ノ頃童子見テ御告アリ高野山ノ学匠淳窓律師ニ勅アリテ此処へ下向有如来尊像

ヲ拝シ奉り奏聞アリテ天長四黄金千両被
下置奉仕建立其頃四十二坊ト云
亀淵山飛光寺
窟 薬師瑠璃光如来
如来亀ニ乗座ス

ここでの律師の名は『雲陽誌』の記述と同名であるが、薬師如来出現の〈場〉に関しては触れられていない。そして代わりに、淳和天皇に直接「童子」がお告げをしたことをそもその発端としている点が前二者と異なっている。

そこで次に、これまで述べてきた縁起の骨子をまとめてみると、以下の3点が共通点として指摘できるものと思われる。

- ①. この地に亀淵山飛光寺が開かれたのは淳和天皇の時代であること。
- ②. 開創に直接関わったのは真言系の僧侶であること。
- ③. 本尊の薬師如来にはその使わしめられた存在として「亀」がいること。

このうち①の時代の出雲地方では、引用文中にあったのと同じ天長2年(825)に枕木山華藏寺(松江市：当時は天台宗、現在臨済宗)が開創されたと云われることが示すように、山岳仏教が力をもっていたものと考えられる。このことを②と考え合わすなら、この立久恵峽においては真言系の山岳仏教寺院が開かれたということになる。また③に関しては現在峽谷に見られる「神亀岩」・「亀ヶ淵」などの地名の由緒にも示されるところであるが、ここで祀られている薬師如来の特質として指摘されているわけである。これらの内容は、現在霊光寺で配布されているパンフレット類でも必ず触れられている点であり、実際その内容の真偽は別にして、ここへの参詣者に対してそれらは〈伝承の事実〉として提示され

ていることになる。⁹⁾

縁起から以上のように歴史を持つことが明らかになった飛光寺であるが、この寺院の実態を伝える記述となるとこれもまたあまり数多いものとはいえない。先にも引用した『雲陽誌』によるなら、18世紀前半の立久恵峽の様子は以下のようにある。

此山(立久恵山：引用者註)乙立村の東北なり蘆渡より九折の坂路をあかれは大やすみといふ所にいたる東は出雲大川道の湖水北に杵築の浦々神西の池三瓶か地獄なと手にとるはかりにして谷のくまくまには消のこる雪いと白くみへて多ならぬ風景なりそれより百坂はかりを越て山頭にのほり薬師堂にいたりぬ山の高さ二百五十丈岩窟の内に権現鎮座の保古良あり此邊に堂見岩かきかけ岩瀧見岩狼岩腰のし岩なと高さ二百丈或は百丈くとし瀧小僧瀧清々たり直下せは千尋の谷深して銀河の落るかことし・・・昔は美々しき僧坊なともありしとかや何頃か兵火のために焼亡して今は纔の草堂一字のみなり本尊は山の東面を穿てすへたてまつり朝夕仕たてまつる人もなくさなから雲霧不断の香をたき夜月無盡の燈をかゝけ幽邃孤絶の地なり

これよりまず立久恵峽を訪れる道筋が、今の県道のような神戸川沿いに開かれていたのではなく、現在霊光寺が背にしている山の尾根の丁度裏面の、出雲市の芦渡から山道が開かれていたことが明らかになる。この点今に伝わる伝承でも、大正年間に県道ができる以前は川沿いの道はなく、右岸の尾根沿いに険しい樵道があったのみといわれている。また神戸川を利用した舟運に関しても、『游神亀峽記』に見える桃白鹿の記述からもその点が窺

えるように盛んであったとは言い難く、中国電力の来島ダムが昭和31年（1956）にできるまでは、水量がいまの倍以上あったとされ、筏を流す程度は見られたものの、遡行するためにはかなりの困難を伴ったものと思われる。従って、近世において（というより県道ができるまで）この地を訪れるには、景勝を愛でる藩主などごく一部の¹⁰⁾人々を除き、峡谷の北側からの山道利用が普通であったものと思われる。現在でもその面影として、当時の道沿いに一丁仏を見ることができるといふ。そして飛光寺自体も、現在の靈光寺の場所とは異なりもう少し高い所に位置していたといわれている。またこの当時にはすでに、『飛光寺縁起』では千坊あったとされる僧坊は兵火のために焼亡し、草堂が一字のみの状態で「朝夕仕たてまつる人もなく」とあるように荒廃していたことが明らかになる。

この点は、それより少し後の宝暦4年（1754）に書かれた『神戸郡萬指出帳』に次のようにある。¹¹⁾

一、立久恵亀瀨山飛光寺 無旦那寺 無住

堂式間ニ三間 長板葺

本尊薬師如来 脇立十二神

燈明田 弍畝三步 御檢地帳ニテ被下候処五拾參年以前午洪水ニ不殘川欠相成候

浄土宗古志村阿弥陀寺 抱

つまり祀っていた本尊などに変化は見られないものの、この寺は無住で、しかも真言宗の支配をはなれて浄土宗の阿弥陀寺持ちになっていたのである。かかる時代に飛光寺がいかなる宗教的役割を担っていたかは明らかにはならず、ましてやその真偽は別として、

千坊もの隆盛をほこっていたというこの寺がいかなる事情でこのような零落状態になったかは知る由もない。ただ山岳仏教として始まり、おそらくは真言系の修験の行場であったと推察されるこの寺の衰退は、単に寺自身のもつ事情が作用したのみならず、近世の出雲地方では修験信仰が不活発であったと指摘されるように、¹²⁾地域的な特質とも関連して生じてきたことは充分考えられることと思われる。

このような情勢で迎えた明治初期の神仏分離時には、飛光寺の本尊仏・脇立十二神将などはすべて抱寺であった古志の阿弥陀寺へ移され、この地からは仏教的色彩を持つものはすべて払拭されることとなった。そして以後それまでの神仏混淆時代に併せて祀られていた立久恵神社のみが「天柱峯」の岩窟の中に残され、聖地としての立久恵峡は「神社」として存続することとなった。この神社に関しては、明治初期の「神社由緒取調書」につき¹³⁾のような記述が残されている。

無格社立久恵神社御由緒調査書

社伝

中古神仏両部ニ属セシモ明治參年十月神社調ベノ際仏体ヲ除去シ神社トナレリ
祭神ハ大山祇命猿田彦命ナリ

しかしこのような変化を経てきた立久恵峡の宗教施設は、明治末期の神社整理政策の流れの中、明治42年（1909）7月には、当時の村社であった笈神社に合祀されることとなった。そして7月末には「天柱峯」の岩窟の中から御神体が運び出され、あとにはただ、岩窟に組み込まれて建てられていた厨子のみが残されることとなったのである。即ちこの時をもって、古くから宗教的な聖地として続いてきた立久恵峡からその核ともいべき宗教施設が取り除かれ、宗教制度上信仰の依り代と

なる神仏が一切消滅してしまったわけである。¹⁴⁾

Ⅲ. 立久恵山靈光寺の誕生

立久恵峽から宗教施設が一扫されたと同じ明治42年、当時の簸川郡長より神戸川沿いに出雲今市と郡内の奥地を結ぶ郡道の整備案が郡会に提案された。この案のルートに対しては、地区の利益の点から多少の反対も見られたが結局原案通りに認められ、明治45年(1912)には工事が着工された。これが現在の県道出雲三次線のもとになった道であるが、難工事の末、大正2年に完成した。そしてこれ以後立久恵峽への交通の便は格段に良くなり、それに連れて奇岩の続く峽谷美を求める観光客の姿が見られるようになったという。つまりそれまで藩主や文人墨客などごく一部の人々を除き、宗教的目的を持って訪れる人々が大半であったこの地が、施設の撤去と同時に、信仰とは無関係な景勝探訪を目的とする人々の来訪を盛んに受けるようになったわけである。かかる情勢を、以前までの認識をもっていた人々がどのように受け止めていたものかは定かではない。しかしこの地に寺院を再建しようとする動きは、それから7年後、赤木来蔵氏と森山玄昶福知寺住職¹⁵⁾の出会いによって具体化しだすこととなる。

赤木来蔵氏は後の靈光寺二代目住職となった人物であるが、その経歴は「立久恵峽 故赤木昶天和尚」という、現在靈光寺で配布しているパンフレットから知ることができる。それによると氏は明治18年(1885)に今の出雲市東園町で出生し、小学校卒業後規矩建築を学んだという。信心深く、仏学にも参じていたが、17歳の頃過度の勉強がたたって神経衰弱となり、人の勧めによって「天柱峯」中腹の岩窟に参籠した経験を持っていた。そこ

にあったのは制度的にいうなら立久恵神社であるが、ここが病氣治しの〈場〉として「人の勧め」に出てきた点は、当時の人々のこの地への関わりの実態を示すものとして興味深い。その際に氏が〈神との合一〉のような神秘体験をしたか否かは不明であるが、ともかく無事病氣は治癒したものという。そして氏は建築方面でさらに研鑽を積み、京都の知恩院や東本願寺などの工事の現場監督をへて宮内省内匠寮に入り、一時は皇室関係の建物造営に関わっていた。その後自宅にて研究生活に入ったが、その成果が認められて松江工業学校の助教諭となり、その傍ら各地の寺院建築に参与していたという。

赤木氏が森山住職と出会ったのは、丁度そのような折、森山住職の依頼で福知寺本堂の再建設計を担当するようになった際である。この時赤木氏は、参籠以来持ち続けていたと思われる宿願の立久恵峽に寺院を再建する案を謀ったのである。森山師は曹洞宗の本山布教師として全国に足跡を残すなど熱心な教化活動をしてきたが、この申し出に対し大いに賛意を示し、積極的に有力者に声をかけるなどして建立に向けての準備にとりかかった。

さて寺院再建の具体的経過であるが、当時の記録類は現在散逸しており、またそれに関わった人々も残っていない。そこでここでは、昭和49年にそのような事情を心配して若干の資料と聞き書きをもとに記録をまとめた、乙立町の今岡美友氏の手書き原稿『立久恵山靈光寺由来記』¹⁶⁾を参考に略述する。

まず最初に寺院建立計画が公にされたのは、大正7年(1918)8月3日夜、乙立地区の部落代表者や有志などを集めた会合の席であった。この時には「天柱峯」下の山腹を整地して境内地を造成するといった計画内容の発表

とそのため協力要請がなされた他、赤木氏による立久恵葉師信仰の話があったが、結局無事参会者の合意を取りつけることとなった。寺の敷地や建築用材については、当時峡谷内の神戸川左岸の地主であった出雲市今市在住の遠藤嘉右衛門氏から寄付されることとなり、8月11日からは、乙立地区をはじめとした多くの地域から奉仕人夫が集まり、いよいよ作業が開始された。赤木氏の設計した根本堂は、その専門の知識を生かした総丸木造りの方四間、方形造りの瓦葺き屋根の、建築史上からも珍しい形を採用することとなった。

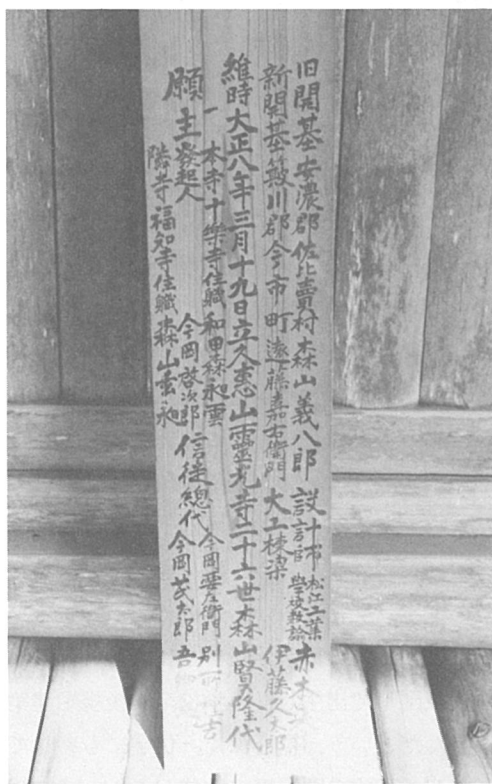
ところでこの当時、寺院を新造するということは法律上非常に面倒なことであった。ところが丁度その頃、安濃郡佐比売村（現在の太田市三瓶町）の素封家であった森山與八郎氏宅で、以前から森山家の位牌寺として邸内にあった「靈光寺」を、当主がキリスト教に改宗したことから廃寺にするという情報が流れてきた。これを知るや早速寺籍の譲渡を申し入れたところ、応諾を得ることができ、結局寺号の「靈光寺」の他、本尊仏である釈迦牟尼仏、梵鐘、関係仏具一式を譲り受けることができた。

このようにして寺院開創に必要な条件は着々と整ってきたが、工事にかかる資金に関しては大正8、9年にわたりいわゆる「頼母子講」が設けられた。この講は講元を靈光寺として一口百円の講金を集め、一回目の掛金は全額建築資金とし、二回目以降は講員の入札によって決められた落札者がそれを借り受け一定の利息で償還するが、講元はそれを毎年元金百円宛無利息で全額返済するというシステムであった。そのような講の中には地元

といった広い範囲の分布が確認された。このことは単に経済的意味のみならず、当時立久恵峽に寺院を新造するという宗教的意味づけがこの地域で広く歓迎されていたことを示すものと考えられる。

以上のような経過を経て、大正8年(1919)3月には根本堂をはじめとした付属建物が竣工した。そして同月19日には盛大な入仏式が挙行され、福知寺住職の森山玄昶氏を初代住職として立久恵山靈光寺が誕生したのである。

このようにして新生成った靈光寺は、70年近くたった現在、10軒の檀家を持つ曹洞寺院としてその法灯を守っている。しかしいっくらこの寺が赤木氏の信仰心の発露がきっかけで始まったものとしても、いざ実際に寺院運営



〈写真1〉靈光寺根本堂の棟札靈光寺誕生に力を尽した森山玄昶、赤木来藏などの名前が見える

をしていくとなるとこれだけの檀家数ではその経済的基盤が不十分であろうことは想像に難くない。ましてその10軒も当初からあったわけではなく、これといった大旦那も持たずに、全く新しい寺院として生まれた靈光寺が現在まで存続している背景には、歴代の住職などの献身的な努力があったものと思われる。以下この点を見て行くことにする。

まず初代の森山昶天住職は、兼務住職でありながら積極的に寺院運営にあっていた。ちなみに当時の寺院行事は次のようであった。

春・秋彼岸 大法会
 5月1日 養蚕供養
 6月15日 五百羅漢祭り
 11月15,6日 養蚕供養, 報恩感謝祭り

このうちまず彼岸の中日には法要が執り行なわれたが、特にその夜には子の刻から「奥の院登山法要」が挙行されていた。これは導師をはじめ信徒総代などが精進潔斎の後、白装束で「奥の院」(「天柱峯」の岩窟)まで登り法要祈願をしてくる行事であったが、出発から下山までの間一切無言のまま実施されるという神秘的なものであったという。一行には先導として近くの山伏も法螺貝を奏して参加していたといい、必ずしも曹洞宗の儀軌に則っていたとはいえない難い形態を採っていたものと思われる。この点は立久恵峽の環境を生かしてここに独自の行事を創設しようとした森山住職の意欲を示すことと推察されるが、数年続いた後に転落事故があり以後行なわれなくなった。「五百羅漢」に関しては次章で詳述するのでここでは説明を省くが、「養蚕供養」があるのは、当時の農家が副業として盛んに養蚕を行っていたことと関連しているよう。このことから、時代のニーズを積極的に取り入れようとする靈光寺の姿勢が窺われる

るものと思われる。

行事以外にも森山住職は、本堂や庫裏を兼ねた「神亀館」を開放し、村内外の青年団などの会合、研修会などの便を計って教化活動の拠点として活用していた。さらにまた山内の整備にも心を配られ、寺院創設当初より立久恵峽を自然植物園とすべく、植物学者の平田駒太郎氏に依頼して構想を練っていたほか、大正13年(1924)9月には京都の池田繁太郎氏からの寄付をもとに、対岸の県道と結ぶ「浮嵐橋」を架設した。

そのような森山住職が兼務を退くこととなり、後を受けて二代目住職となったのは、靈光寺誕生と同じ大正8年に得度した赤木来蔵こと赤木昶天氏で、大正15年3月10日のことであった。寺の『過去帳』によると氏は、靈光寺28世にあたり「中興清涯昶天大和尚」とあるが、「中興」の名に恥じない献身的な活動で山内整備に尽くしていた。

入山と同時に赤木住職は、靈光寺に向かってその右後方の山腹に見える「饅頭岩」の上に石塔を建てたが、その際台座部分に石室を設けていた。これは寺院運営にあたり万一衣食の途が尽きてしまったならここで入滅するために作ったものと伝えられる。かかる決意の赤木住職時代の特色は、氏の俗人時代の経験を十二分に生かした、建築・土木関係の分野からの山内整備にあるものと思われる。そうして例えば、「奥の院」までの新参道や神戸川沿いの周遊歩道の開墾、神儒仏の教化道場としての「三合閣」の建設、そしてまた縁起にもあった如来を乗せた亀が沈んだといわれる「亀ヶ淵」上に「不老橋」という吊橋の架設をするといった、現在山内で見られる主な施設配置などの基礎を整備したのである。

このうち「三合閣」ができたのは昭和7、

8年頃のこととされるが、特に太平洋戦争中には島根県教化団体連合会の指定道場として、各種の錬成会が盛んに行なわれていたという。曹洞寺院の山内に、仏教以外の宗教まで包含するような施設が作られたことから推察されるように、赤木住職もまた曹洞寺院の住職でありながら、その教義的な教えにはあまり拘っていなかったものと思われる。そしてむしろ、立久恵峽という〈場〉に則した独自の信仰のあり方の確立を、このような建造物その他の山内整備を通じて実現しようとしていたものといえよう。

そのようにして整備が進められていた山内であるが、昭和18年の9月20日には台風による大洪水のため、「不老橋」は流失、「浮嵐橋」も橋板のほとんどを流失するという大災害が起こった。この時赤木住職の住む「神亀館」は二階を越す濁流に襲われ、建物の流失は免れたものの、家財道具一切を流失してしまった。余談であるが、この時また寺の諸記録も流されたため、この地の「宗教史」再構成に困難が生じているわけである。しかし赤木住職はその後も、災害復旧に力を尽くし、昭和36年1月14日に77歳で大往生するまで、寺門の興隆にあたっていた。

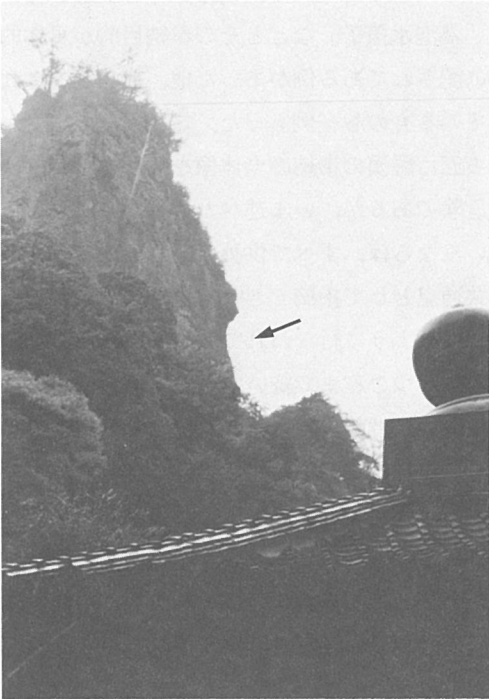
三代目住職は、赤木住職の末弟で湖陵町三部の曹洞宗浄土寺住職、赤木玄光氏が兼務であたることとなった。しかし代を受け継いだ昭和36年7月4日には、集中豪雨による土砂崩れが本堂を襲い、流失こそ免れたものの甚大な被害を受けた。さらに昭和38年2月には豪雪、翌39年7月18日にはまたもや集中豪雨による被害を受け、この頃の靈光寺は非常に荒れた状態にあった。それらの災害復旧が地元の寄付などで一段落したのは昭和40年のことで、それに続く国の治山事業としての工事

が完全に終了したのは、昭和42年度の終わりのことであった。

そうしてようやく山内が平静を取り戻した昭和43年4月26日、副住職として出雲市東神西町の玉泉寺より玉木閑山氏が入山し、これ以後寺に住み込んで靈光寺運営にあたっている。玉木氏も山内整備に献身的であるが、とりわけ積極的な信徒拡大に努めている点が特徴的である。その一番の例が千体仏奉納であるが、この詳細は次章で触れる。その他パンフレットなどの案内書を数種類作成して観光目的でこの地を訪れる人々の教化に努める一方、昭和59年から始まった「出雲十大薬師靈場」には第十番靈場として参加するなど、多方面から寺院運営にあたっている¹⁸⁾。

そのような玉木氏のこの地に対する基本的認識は、靈光寺で配布している案内書の内容から明らかになる。まずその見出しには「立久恵山靈光寺立久恵神社」とあり、近世までの飛光寺の時の形態をそのまま踏襲したように、ここを神仏混淆した〈聖地〉と考えていることが示されている。またその利益についても、「立久恵神社」と「立久恵薬師如来」を全く均等に扱った説明がなされている。ところで前述してきた立久恵峽における「宗教史」を思い返してみると、飛光寺の本尊仏であった薬師如来は阿弥陀寺に、立久恵神社のご神体もまた笈神社に合祀されており、現在そのどちらの依り代も靈光寺には残されていないはずである。とすると、この記述は一体どのように考えたらよいのであろうか。玉木氏はこの点につき、この地では神仏混淆の時代から「天柱峯」こそがご神体であり薬師如来であると観念されていたとし、この観点からいうなら現在見る「天柱峯」自体が、立久恵神社のご神体であり、かつまた立久恵薬師如来

ということになる旨説明される。その際に示される例としては、「天柱峯」全体が、あるいはその中程の岩の膨らみが、仏像の横顔に見える点がある。特に後者については、位置により綺麗な横顔に見え、この岩柱を「天然大仏」と呼ぶ根拠は理解できるように思われる。
(＜写真2＞参照)



＜写真2＞霊光寺根本堂ごしに「天柱峯」を望む。矢印の部分が大仏の横顔に見える

先にも述べたように、初代の森山住職も、二代目の赤木住職も共に曹洞宗の教義にあまり拘泥せずに、立久恵峽という伝統を持ったこの地に即応した教化活動を繰り返していた。玉木氏もまたこの流れに立ち、その延長上で寺院運営にあたられているものと見なされよう。従って、このような住職達によって形成されてきた霊光寺のあり方は、大正期に全く新しく開かれた寺院としてのそれではなく、

立久恵峽という〈場〉の伝統に根付いた形で作られているものということができると思われる。換言するならば、霊光寺は聖地復興の手がかりとして誕生したということになる。

IV. 石仏奉納の実態

1. 立久恵峽における石仏奉納の歴史

霊光寺誕生以前、この地に石仏を奉納するような組織的な信仰行動様式が確立されていたかどうかは定かではない。現在の山内の様子から推測するに、そのような様式があったとしてもあまり盛んであったとはいえないが、ともかく「奥の院」周辺などには、近世以前のものと考えられる石仏が若干見られる。

かかる信仰行動が様式化され、参道脇に見られる五百羅漢の奉納が開始されるようになったのは、初代住職の森山玄昶氏の発願によるものであった。前述のように立久恵峽は「山陰の耶馬溪」と呼ばれてきたが、本家本元の耶馬溪には五百羅漢寺という寺があって五百羅漢を祀っていたため、これに習って立久恵峽にも五百羅漢の造立を考えたといわれる。

神戸川を背にして霊光寺参道の右側の広場が「五百羅漢広場」と呼ばれ、岩壁の凹凸を利用して230余体の羅漢像が安置されている。これが霊光寺誕生の直後から始められた、組織的な石仏奉納の名残であるが、当時の奉納の実態を示す資料として、現在寺で保存している『五百羅漢請合帳』（『台帳』と略述）が残されている。この冊子の表紙には「福本」及び「大正8年10月以降」という添書きが見られるが、このうち前者は石材店の名前で、この資料が元から寺にあったものではないことを物語っている。そしてまたこの奉納自体が具体化してきたのは、後者よりこの年の10

月頃からであったことが明らかになる。

『台帳』の内容は、大正8年12月7日から大正11年10月27日までに受付された79体分について、それぞれ受付年月日・石像番号・奉納者の住所(町村まで)・奉納者名・石像を送り出した年月日が記されている。また記入部分の末尾には、石像番号と送り出した年月日のみ記入してあるものが15体分あり、それらの中で一番新しい期日は、大正12年2月18日となっている。最初の受付日である12月7日には、靈光寺誕生のパトロンの存在であった遠藤嘉右衛門氏により釈迦、総代の今岡啓次郎氏により文殊・普賢の奉納があり、以後この三尊仏を中心に羅漢が配せられるようになったものと思われる。

現在ここに示した以上の奉納記録は、靈光寺に保管されていない。そこでこの79体の記録に限って見て行くと、奉納者の居住範囲は<表1>のような分布を示すことが明らかに

なった。これより当時の石仏奉納が、立久恵峽周辺の村々を中心に、今でいう出雲市・簸川郡佐田町といった、ある程度狭い範囲に限定された地域の人々によりなされていたことがわかってくる。奉納者はその多くが単数であるが、中には名字の異なる2~4人の共同でなされている場合も見られる。またさらにコメントとして、「為衆生」・「為先祖代々」・「為泡水孩子」などとその奉納目的が具体的に記されてある例があった他、戒名が記されているものも一例あった。この程度の事例から五百羅漢の奉納の全体像を即断することは危険であるが、いま述べた<祈り>に限って言うならば、すべて供養の系列に入ることが共通点として指摘できよう。

このように行なわれていた五百羅漢の奉納が、いつごろまで続いていたものかは明らかなでない。戦前まで行なわれていたという伝承も聞かれるが、これまでに知り得た資料からは、二代目住職の赤木昶天氏自身が積極的にこの運動を継承したという記録は見いだせないのである。その詳細はともかく、森山住職により始められた五百羅漢は、現在残されている数からみて、(勿論洪水で流された可能性も否定できないが)目標の半分ほどで頓座してしまったものと考えることができよう。

この運動を積極的に引き継いで、靈光寺運営の基盤を確立しようとしたのは、現副住職の玉木閑山氏であった。氏が入山した昭和43年4月当時、この寺は檀家10軒のさびれた状態であった。そこで玉木氏は、寺の復興のために五百羅漢の奉納運動を復活すべく、村の有力者の持田恒定氏に相談を持ちかけた。当時持田氏は戦後の公職追放の身であったが、県内の同じ境遇にある人々と共に「島根侍の会」(初めは「浪人の会」とっていた)を作っ

<表1>五百羅漢奉納者の居住地

市町村名	現在の主な市町村名	奉納数
西須佐村	簸川郡佐田町	26
乙立村	出雲市	24
神西村	出雲市	4
松江市	松江市	4
朝山村	出雲市	3
園村	出雲市	3
江南村	出雲市	3
布智村	出雲市	2
知井宮村	出雲市	2
東須佐村	簸川郡佐田町	2
塩冶村	出雲市	1
山口村	簸川郡佐田町	1
久村	簸川郡多伎町	1
都野津村	江津市	1
京都市	京都市	1
無記入		1
合計		79

て、県内各地でそのような人々と親睦を計っていた。たまたま会の事務局長であった安部頼太郎氏にこの案を持ちかけたところ、安部氏は積極的に賛意を示し、どうせやるなら1,000体を目標にするようアドバイスをし、さらに松江市にある自宅を事務所として開放する旨申し入れたものという。このような経緯があったのは昭和45年のことであったが、その後県立自然公園である峽谷内に石仏建立の許可を申請し、それが認められた昭和48年秋にはいよいよ「立久恵峽千体仏の会」が発足の運びとなった。



<写真3> 千 体 仏

昭和53年6月25日に出された『立久恵峽の大観』という会の広報紙によると、その役員は顧問・会長・事務局長各1、相談役5、地元世話人4、地方世話人23、事務局幹事2の、延べ37人で構成されていた。このうち地方世話人は、県内はもとより東京・横浜・大阪・下関・熊本といった、関係者の縁故をたどった広い範囲の人々であり、また県内の松江八束地区・出雲市簸川地区・雲南地区には地区ごとの世話人が設けられていた。これらの中にはそれぞれの地域内の有力者と見なされる人々の参加が多々あったが、それは安部氏の人脈に負うところが大きいものといわれる。

ここに奉納される石仏は宍道町特産の来待石で造られ、高さ48cmの規格を持つが、種類に関しては、地藏菩薩・観音菩薩を始めとして様々なものが見られる。その選択は奉納者自身に任されており、さらに後背の有無や顔の形などについても細かい希望が取り入れられている。そのような希望は特に、具体的な死者の供養の際に出されることが顕著で、それが故に同種の石仏でありながら、個性的な形態を持つ像がしばしば見られることになる。奉納する際に制約は一切なく、従って奉納者や供養対象者の宗教には仏教各宗派を始め、神道や新宗教など多様なものが見られる。このようにいわば超宗派的な人々からの石仏奉納が受け付けられている背景には、靈光寺誕生以来の宗派にこだわらない、立久恵峽という聖地に対する信仰が作用しているものと推察される。この点は千体仏奉納の案内書きのチラシにある、以下の一節からも窺うことができる。

千体仏の会は、この神峽の再興発願主であった赤木昶天老師の神儒仏一体の唱導の心に触れ諸々の宗派を越える石仏のご寄進を全国津々浦々の心ある人々に呼びかけ、この事業を推進することとしました。

いざ奉納が行なわれると、寺と事務局の双方に保管してある奉納台帳に記録がそれぞれ記帳され、一体につき一本の塔婆が靈光寺の根本堂に安置されて祀られることとなる。また毎年5月と11月の第一日曜日には、新しい石仏の開眼供養が行なわれ、この時には同時にこれまで奉納された全ての石仏の法要も併せて行なわれている。

以上見てきたように、立久恵峽においては五百羅漢奉納とそれを受けた形での千体仏奉

納という二種類の石仏奉納運動が行なわれてきた。これらに共通する最大の運動目的は、ある程度安定的な数の信徒の確保にあったものと考えられる。つまり近世以前の檀家制度の中で培われてきた、一般的な寺院運営の基盤ともいべき檀家の確保が、靈光寺のように大正年間に新たに開かれた寺院の場合には非常に困難な状況にあり、それが故にイエの制約を受けない、個人レベルの選択的になされる信仰の受け口を作ったものと解釈することができる。とりわけ千体仏の開眼供養の際に、以前の奉納仏の法要も同時に行なわれる点は、そのような信徒をある程度恒常的に靈光寺につなぎ止めるきっかけを作っているものと見なすことができよう。

2. 千体仏奉納の実態

千体仏は現在1,000体近く奉納されているが、靈光寺ではこれを『千体仏銘録』（『銘録』と略称）という台帳に、奉納者名・その住地・奉納仏名・奉納目的などを記録して整理している。その方法は石仏一体ごとに「いろは」の順の文字で対応させ、「い」から「ん」までの48体を一冊の冊子に記録して、これをまた「いの巻」から順番に名付けて整理している。つまり48×48で2,304体で満杯となるわけであるが、ここまでを第一期の千体仏とするのである。ちなみに昭和62年11月現在では972体奉納されており、『銘録』のほうは21冊目の「なの巻」の記録が進行中である。本稿においてはこのうち、使用中の1冊を除いた20冊、総計960体の記録を対象にして分析することにしたい。

まず最初に奉納者の居住範囲に着目して整理してみると、<表2>のような分布が明らかになる。これより奉納者の範囲は、東北・北海道以外の1都2府18県に及んでいること

<表2>千体仏奉納者の居住地

都道府県名	奉納数	静岡県	3
島根県	853	高知県	2
神奈川県	20	奈良県	2
東京都	17	千葉県	2
大阪府	14	熊本県	1
広島県	11	佐賀県	1
山口県	7	愛知県	1
岡山県	5	山梨県	1
福岡県	5	埼玉県	1
京都府	4	茨城県	1
鳥取県	3	無記入	3
兵庫県	3	合計	960

<表3>千体仏奉納者の居住地（島根県内）

市町村名	市町村名	市町村名	市町村名
出雲市	380	浜田市	14
松江市	181	仁多郡	13
大原郡	108	仁多町	12
大東町	65	横田町	1
木次町	39	安来市	9
加茂町	4	平田市	9
簸川郡	49	江津市	8
湖陵町	12	邑智郡	6
佐田町	11	邑智町	4
斐川町	9	川本町	1
多伎町	9	瑞穂町	1
大社町	8	能義郡	4
八束郡	30	広瀬町	3
東出雲町	15	伯太町	1
宍道町	7	益田市	3
八雲村	4	邇摩郡	3
玉湯町	3	仁摩町	3
鹿島町	1	無記入	5
大田市	17	合計	853
飯石郡	14		
三刀屋町	12		
頼原町	1		
掛合町	1		

がわかるが、中でも全体の88.9%に相当する853人が島根県内で占められている点、また近県であるはずの中国地方からの奉納ではなく、神奈川・東京・大阪といった大都市からの奉

納数が上位を占めている点などが目だった特徴として指摘できる。『銘録』の一部に書かれているコメントから一般に、大都市や遠隔地からの奉納者の多くは、県内、とりわけ出雲市周辺の出身者であることが多いが、この点をいま述べた2点と考え合わせてみるならば、立久恵への「石仏奉納」は、島根県内あるいは島根県に關係の深い人々の信仰に基づいてなされていることが推定されよう。

そこでさらに県内の奉納者の居住地を、郡市町村別にまとめてみると<表3>を得る。ここより県内では、距離的に遠い石見地方の那賀郡・美濃郡・鹿足郡及び隠岐地方を除く

全市郡に分布していることが明らかになる。このうち出雲地方からの奉納者は797にのぼり、県内奉納者の実に93.4%、さらに立久恵峽のある出雲市からだけで44.5% (380) を数えることが確認された。

こうして見てくると、千体仏奉納運動は立久恵峽を中心とした、ある程度明確な地域性を持った範囲に限定される信仰行動様式であると見なすことができよう。この点は同じく出雲地方にある出雲大社や八重垣神社などのように、全国各地の広い範囲から信仰行動を集めている宗教施設とは、その信仰の基盤を異にしているものと考えられる。¹⁹⁾

<表4> 奉納された千体仏の種類と<祈り>の内容

<祈り>の内容		供 養				祈 願			感 謝
仏 像 名	奉納数	具体的 死 者	先 祖	水 子	その他	病氣平癒	家内安全	その他	
地 蔵 菩 薩	4 5 8	2 3 9	1 5 4	7 6	1 3	1	6	6	2
水子地藏菩薩	1 5		2	1 4					
延命地藏菩薩	7		1				2	3	
観 音 菩 薩	2 4 7	1 2 1	1 2 6	5	8		3	4	
白衣観音菩薩	3	2	1						
慈 母 観 音	2	2	1						
千 手 観 音	1	1							
持 蓮 観 音	1	1							
阿 弥 陀 如 来	9 8	4 6	4 7	1	3				
釈 迦 如 来	3 3	7	1 5	1	1		1	1	
不 動 明 王	2 2	1 1	8					1	
羅 漢	2 1	1 3	1 5	1					
大 日 如 来	1 3	4	7		1		1	2	
薬 師 如 来	1 3	5	4			5	5	1	1
勢 至 菩 薩	6	2	4						
普 賢 菩 薩	4	3	1						
弥 勒 菩 薩	3	2							
文 殊 菩 薩	3	2	1						
人 間 像	3	2							
弘 法 大 師	2	1	1						
虚 空 蔵 菩 薩	2	2							
無 記 入	3	2	1						
合 計	9 6 0	4 6 8	3 8 9	9 8	2 6	6	1 8	1 8	3

単位：奉納数は「体」、供養・祈願・感謝は延べ数で「件」

次に奉納された石仏の種類と、その際になされる〈祈り〉の内訳を整理してみると前頁の〈表4〉のようになる。これよりまず奉納された石仏の種類は全部で21種確認されるが、地蔵菩薩系が半数の480体、観音菩薩系が254体でこれだけで全体の76.5%を占めていた。また石仏の属性からいうと、如来157体、菩薩752体、明王22体、羅漢21体、人間5体となっていた。さらにこれを〈祈り〉との絡みから見て行くと、水子地蔵菩薩は15体のうち「水子供養」14件、「先祖供養」2件で供養のみの〈祈り〉が、また延命地蔵菩薩は5体（無記入の2体を除く）のうち「延命長寿」3件、「家内安全」2件、「先祖供養」1件と祈願中心の〈祈り〉がなされていた（〈祈り〉は延べ数）。この点、全石仏のうちでもこの2種の石仏のみが特にその名前に具体的な利益が示されており、その機能に関してある程度明確な共通認識が持たれて奉納行動がなされることが推察される。ちなみにそれ以外の石仏は、何れも供養中心で選択されていた。また宗旨との関連については、人間のうち弘法大師（2体）を除く3体はすべて神道の信者による「具体的死者」の供養であり、また阿彌陀如来を選択して供養のために「具体的死者」の戒名を記した54.3%からは「釈」あるいは「釈尼」の文字が確認できたため、これは浄土真宗系の人々の〈祈り〉と推定できた。

次に〈祈り〉の内容に着目すると、その総数は延べ1,026件にのぼっていた。その内訳は供養が95.6%で最も多く、祈願4.1%、感謝0.3%となっていたが、このような比率が立久恵峡の特質であるのか、「石仏奉納」全般にいえることなのかその判断は措くとしても、千体仏の大半が供養を目的とてなされていることは留意すべき点であろう。また〈祈り〉

の件数が奉納数を上回っていることから、一体の「石仏奉納」が複数の目的でなされる場合のあることがわかるが、その複合具合は供養と祈願双方に跨るものが11件あった他はすべて供養内、祈願内の併願であった。このことから奉納者の意識として、ひとたび「石仏奉納」をする場合、そこで何でも祈ってしまうのではなくて、供養は供養、祈願は祈願といった微妙な区分がなされることが多いものと思われる。そして同一人が二種の〈祈り〉をする場合には、例えば供養のためには地蔵菩薩、祈願のためには薬師如来などというように、石仏の種類を代えて複数体奉納することがしばしば見られた。

さてでは供養の〈祈り〉は如何になされているのであろうか。まず最も多いのは「具体的死者」のためのもので、供養全体の47.6%を占めていた。その際奉納者からみた供養対象者の続柄は、明記してあるものの多くが親・キョウダイ・子供といったイエの系譜上の直接対面が可能と判断されるような狭い範囲の人々であった。「先祖」の場合は39.7%で、「先祖代々」といった抽象的な表現でイエの系譜に連なる人々をまとめて供養していた。中には過去帳から写してきたと思われる戒名の一覧表が添付されている場合もしばしば見られ、「石仏奉納」を通じて立久恵峡を先祖の祀られる霊地的なく場>としていることが推定される。また「水子供養」は98件9.5%を占めるが、地蔵菩薩系の奉納だけで90件に上っており、先にも見たように、ここでも「水子供養」=「(水子)地蔵」の図式がかなり定着していることが明らかになる。最後に「その他」というのは、供養対象者がイエとは無関係な抽象的集団の場合で、「駆逐艦〇〇戦死者」といった戦没者の供養が8件、「有縁無縁

が6件、葬儀社による「△△年度取扱諸仏」の供養が4件、「～会物故者」というような何かの会員の供養3件、「××建設物故者」といった会社殉死者、(これまでの)友人の供養が各2件、そして「無縁船算笥の供養」が1件であった。このうち「有縁無縁」は浄土宗・浄土真宗・寺宗・日蓮宗・曹洞宗の僧侶から超宗派的になされていることが明らかになった。ここでかかる形態の奉納が見られる理由としては、昭和52年11月6日に出雲市仏教会による戦争関連の死者の三十三年法要がこの地で開かれたこととも関連するが、曹洞寺院のある立久恵峽を宗派を超えた霊場(=聖地)と見なす認識が、一般の奉納者のみならず、聖職者の間でも持たれていることを示すものと考えられる。

V. おわりに

さて以上見てきたように、本稿においては立久恵峽の「宗教史」を再構成し、そこにおいてなされている「石仏奉納」の実態を探ってきた。その結果この地で行なわれている「石仏奉納」は、聖地復興運動の核として誕生した霊光寺の運営基盤を担うべく、信徒の獲得を目的に始まったものと考えられる。そしてこれを現在行なわれている奉納者の実態から見るなら供養がその中心となっていることが判明した。ならば他に檀那寺を持ちながらここへと関わりを持つ人々にとり、この「石仏奉納」は一体どのように位置付けられるのであろうか。

この点を<祈り>の内容を参考に考えてみるなら、まず宗派的に多様な人々の抽象体である、戦死者・葬儀社の取り扱った死者・会員や社員の死者などがここで供養される背後には、この地を超宗派的な聖地とする観念が

あり、それが故に多様な宗派を合わせ持つそのような抽象体供養の<場>として選択されているものと見なされる。また「水子供養」は一人前の人間と認め難い特殊な死者の供養として檀那寺で扱いにくく、またそれだけでは不十分とも考えられ、さらには私的な問題としてそのことが檀那寺には知られたくない、といった微妙な感情から選択されているものと考えられる。そうして供養の87.3%を占める「具体的死者」と「先祖」の供養については、都会などへ出て行った人々の奉納の背後に代々生まれ住んで来た故郷での供養の<場>の確保の意志が窺えるように、この地が出雲地方西南部の一大聖地(霊場)であるという観念が潜んでいることが推察される。そしてそのような観念に基づき、出雲地方の人々を中心に以上述べてきた「石仏奉納」運動が、広まってきたものと見なすことができよう。

付記

本稿を作成するにあたっては、霊光寺の玉木閑山師からは多大なご教示とご協力をいただいた。紙面を借りて深く感謝の意を表したい。

なおこの研究は、昭和61年度文部省科学研究費補助金[一般研究(A)]「古代出雲文化の展開に関する総合的研究」(代表：田中義昭島根大学法文学部教授)によって現在継続中の研究成果の一部である。

註1) 庚申懇話会編『石仏研究ハンドブック』雄山閣、1985。所収の「石仏初見一覧」(pp.310～314)による。

2) 島根県環境保健部環境保全課からは、『県立自然公園立久恵峽 自然観察モデルコースガイドブック』、1980。が刊行されており、立久恵峽散

- 策の便が計られている。
- 3) 今岡美友『立久恵詩文集』。島根県立図書館蔵の手書き原稿のコピー版による。なお本稿作成にあたっては、今岡氏の多くの論考を参照させていただいた。氏は乙立町在住の郷土史家であったが、残念なことに3年前に亡くなられた。資料の絶対数が不足しているこの地にあつて、多くの資料発掘をされた功績は高く評価されるべきものと思われる。今回の調査で出てきた疑問点の中には、直接伺いたいものも多々あったが、その点は果せなかった。
- 4) 『出雲歙』には「立久恵 俗ニ立株ト云」とあるが、この点につき今岡美友氏は「立株は立杵の誤りならんか」としている。(今岡美友、前掲書)「立株」ならば切株が立っているという意味になるだろうが、このような解釈は今のところ見られない。ここでは今岡氏の論に従い、その点の指摘に止めておく。
- 5) 高橋梅園「白鹿先生の立久恵紀行」、『島根県私立教育会雑誌』314号、1916、pp.21～33. にその全文が収録されている。
- 6) ここでは、現在靈光寺で配布している『古文書 立久恵龜淵山飛光寺縁起』から引用した。
- 7) 黒沢長尚編『雲陽誌』歴史図書社、1976、p. 688.
- 8) 島根県立図書館蔵。
- 9) 信仰現象の実態把握の一助として縁起の内容を用いる際には、史実に照らした内容の真偽性を問うのではなくて、そのような内容が信じられ、護持されてきたという現実を研究の出発点とすべきものとする。筆者はその内容を「伝承的事実」と呼び、「史的事実」とは区別して用いている。その点に関しては、拙稿、「摩尼寺における死者供養の一考察」、『山陰文化研究紀要』24号、島根大学、1984. においても触れたことがある。
- 10) 花田亀麿編『乙立史』、朝山村役場、1950. には、「藩政時代松平藩候派、立久恵清遊を年中行事の一とし、即ち馬木にお成門(旅館大塚屋)を常設し、此処より川舟で遡り、立久恵御賞覽場で一日の清遊を試みられた」(pp.80～81)とある。その他文人墨客の来訪はしばしば見られたという。この点に関しては註3)の今岡氏の文献に詳しい。また現在では日本画家の奥田元宋氏がこの地の作品を多く残している。
- 11) 今岡美友『立久恵山靈光寺由来記』、1974.(出雲市立図書館蔵の手書き原稿のコピー判による)
- 12) 藤岡大拙「出雲の山岳信仰」、宮家準編『山岳宗教史研究叢書12 大山・石槌と西国修験道』、名著出版、1979. この中で藤岡氏は、近世後期に出雲の修験が急速に衰えたことを取り上げ、その原因を松江藩のとった神仏分離政策にあると指摘している。
- 13) 今岡美友編『笈神社移転五十年史』、笈神社々務所、1963、p.8.
- 14) しかし峡谷内には教義的な意味での仏教や神道とは異なる、呪術的な信仰も並存していたものと思われる。例えば神戸川沿いにある「お里の滝」は一名「女陰の滝」とも呼ばれ、「古来、男性がこの滝を仰ぎ見る時には、箭勃たる生気を発し、子宝に恵まれる」(『立久恵子宝縁起』：著者、年代共に不明の刊本、出雲市立図書館蔵)といった近世以前に始まった一種の性神信仰で知られており、また「天柱峯」の岩窟の上から年中したたり落ちている水滴が、眼病の薬になるという伝承が残されている。(今岡美友編『ふるさと読本』、出雲乙立公民館、1982.) 従って寺院や神社が撤去されたからといって、いま挙げたような呪術的な関わりも同時にすべて消滅したものかどうかは疑問である。
- 15) 寺院建立の理由について前掲の『乙立史』で

は、「大正2年郡道の開通を見るや、観光客逐年増加すれど、足を止めて清遊するもの至って少ない。そこで今岡啓次郎、森山玄昶、遠藤嘉右衛門の諸氏等往時をしのび寺を新築せんと企てた」(p.42)としている。このような指摘を全く否定することはできないが、引用文中に、以下にも触れるように寺院建造の直接のきっかけを作った赤木来蔵氏の名前が見られず、また実際地元の人々が有形無形の大きな負担を負っていたことなどを考え合わせるなら、「観光客の足止め」のみを強調することはあまりに一面的な見方であると思われる。

16) 註11) 参照。

17) 平田駒太郎氏は島根県女子師範学校（現在の島根県立出雲高等学校の前身）の教諭で、森山

住職より委嘱されて立久恵峽の調査にあたったものという。一時は靈光寺の宿坊で自炊生活を送りながら通勤したこともあったが、大正10年病没したため自然植物園の企画も立消えになった。靈光寺参道の石段左手にその遺徳を偲び、「平田先生遺髪塔」が建てられている。

18) 一番の一畑薬師から十番の立久恵薬師まで出雲市、平田市、簸川郡斐川町に分布する、薬師如来を祀る寺院を巡拝する運動。宗派別に見ると、曹洞宗5、臨済宗妙心寺派2、天台宗・浄土宗・日蓮本宗各1となっている。

19) 特に八重垣神社の信仰圏に関しては、名子平充美「神社信仰の諸類型—八重垣神社の場合—」、『山陰民俗』47、山陰民俗学会、1986。が参考になる。